社団法人ＪＡ総合研究所　所長　今村奈良臣
ＪＡ総合研究所 Web サイト「所長の部屋」

2009 年 4 月 13 日

第 95 回

中国の食料・農業・農村問題について考える（その６）
―　杜潤生先生の論集の日本での出版に寄せて　―

杜潤生先生と再びお会いできたのは、先に述べた（本欄 93 回）『東アジア農業の展開論理』を出版できた翌年ではなかったか、と記憶している。この著書で中国を担当されたのが劉志仁さんであり、その劉志仁さんがこの本の刊行の報告を杜潤生先生にされたという事情にあったからではないかと推測している。

杜潤生先生は、中・韓・台・日という東アジアの食料、農業、農村、農政の比較研究を志したことを大変褒めてくださり、こういう原点に立った共同研究を若い皆さんでさらに進めてほしいと強調されたことを記憶している。

◆　精耕細作

それとあわせて杜潤生先生のこの時のお話で私の心にずしんと落ちたことが２つある。１つは「精耕細作」ということである。たしか、人民公社の生産隊の農地での農業生産の様子と自留地における農業生産の状態とを比較されたお話の中で出た言葉だったと思う。わずかな狭い土地しかない人民公社時代の自留地では多様な野菜などがきれいに作られ、１～２頭というわずかな頭数の豚でも自給飼料でつややかな姿で育っていたという実態調査にまつわるお話の中で、農業は中国伝統の精耕細作が現段階では重要だと話されたという記憶がある。つまり、農業においては、農民の主体性と創造精神が基本だという指摘である。この一言の中に、1978 年 12 月の改革解放への大転換のなかの中心課題であった農政改革を推進された、先生の思想と新政策路線が込められているように私には思えた。

◆　時間軸と空間軸

いま一つ、私の胸に落ちたことを私なりに先取りして言えば、「時間軸と空間軸の２つの基本視点を明確に踏まえ、現状の正確な分析の上に立って、近未来の展望を描く」ということであった。

先生は、確かこういうことを話されたと記憶している。農業の特性は季節性

や天候如何に常に規定されている。その上、土地の良否、水利の良否に規定されている。そして、１人の農民が水稲や小麦を作ったとしても、成人になってから多くみても一生のうちにせいぜい 30 回か 40 回しか作れないと思う。しかし、農民個々の主体性と創造精神を尊重しつつ、それを計画的に集積、発展させれば、非常に大きな成果が得られるのが農業の特性である。農民の内包する創意、工夫が農業発展の基本だ。革命、建国以来の政策をきちんと総括し、政策の欠陥を排し、農民の創造力を発揮し得る道を作るのが、私たちの役割だという趣旨のことを述べられたことを記憶している。

他方で、私どもが書いた著書を褒めていただきつつ、東アジアのそれぞれの国情や経済、そして発展段階は異なるが、こと農業という視点に立って考えれば、東アジアは共通の基盤を持っている。皆さんは良い仕事をされたが、これはあくまでも出発点であるので、さらなる東アジア共通の課題の追求をしてほしい。そして、東アジア共通の課題を背景に持ちながら、欧米、南アジア、アフリカなどの農業や農政についての研究も進めてもらいたいと強調されたことを記憶している。

この先生とのお話の中で私は、時間軸、空間軸の２つの視点から農業、農政研究の重要性について改めて胸に刻み込んだわけである。

◆　「公・共・私」と Bottom－up　路線

先生は『東アジア農業の展開論理』の序章（「東アジア農業の展開論理」）で私が書いた「公・共・私」の視点で農業、農村、農民の位置付けとそれぞれの関連、その展開方向と展開力学について、興味ある視点だと褒めていただくとともに、さらなる研鑽をするよう激励してくださった。しかし、その先生からいただいた宿題はまだ充分果たしていないのが実情である。いま一つ、先生との対話の中で、私の胸に刻み込んだことは農政のあり方についてであった。一言で表現すれば「Top－Down 路線から Bottom－up 路線への転換」ということである。日本はもちろん、中国でも韓国でも基本的には農政は Top－Down 路線で進められてきた。つまり「中央集権的画一型農政」とでも言うべき政策路線である。これを Bottom－up 路線、つまり「地域提案型創造的農政」にいかに改革するか、ということを先生との対話の中を通して私の胸に刻み込んだ。

後年、私は、旧農業基本法による最後の農政審議会の会長に任じられ、また、1999 年 7 月公布・施行された食料・農業・農村基本法に基づく初代の食料・農

業・農村政策審議会の会長に任じられたが、そのなかで、Top－Down 路線から Bottom－up 路線への転換という政策路線のあり方を説いてきたつもりではいたが、実態は容易に変えられるものではなかった。いろいろあるなかで、１つだけ刮目すべきことは、任期中に中山間地域直接支払制度が確立し、実行に移されたことであり、Bottom－up 路線の展開のごく一端が実現したと喜んでいる。この中山間地域直接支払制度の原理的提案は、私の『補助金と農業・農村』(1979 年 12 月)の中で「Ｒ・Ｄ・Ｆ（Rural Development Fund）の構想」という提案をかつて行っていたが、その理論構想が、現実の農政の場で実現したというものであった。農政改革の実現には提案から 20 年余の歳月を必要とするものであることを痛感してきた。

杜潤生先生との対話の中から、あちこちに話が飛んでしまったが本論に戻そう。

◆　杜潤生『中国農村改革論集』（2002 年 3 月、農文協）の出版

杜潤生先生のこの本を日中国交正常化 30 周年記念出版として刊行できたことを心から喜んでいる。浜口義曠さんと白石和良さん、そして劉志仁さんのご尽力により大変すぐれた中国農業・農政現代史とも呼ばれるべき著書が出版でき、中国農業研究者はもちろん、日中農業交流に関わる方々にとっては必読文献とされるべきものだと考えている。

本書の内容については、761 ページに及ぶ大著であることから、その内容紹介などは控えざるを得ないので、是非とも一読をお願いするしかない。

杜潤生先生の経歴などについては、これまであまり知られていなかったし、先生も私が聞いても多くは語られなかったが、この本のはじめに書かれている白石和良さんの「解題」を読んでいただければ、その経歴や歴史上果たしてきた多大の功績、現代中国農業の生みの親としての位相がおわかりいただけると思う。また浜口義曠さんの「あとがき」を読むと、この訳書の成立史が読み取れると思う。翻訳は、白石和良さん、私の東大時代の教え子の菅沼圭輔君（当時福島大学経済学部助教授、現在東京農業大学教授)、阮蔚（ルアン ウエイ、農林中金総合研究所主任研究員）などが行い、難解な用語については菅沼君が正確かつ周到な用語解説をしているので、読むには困難は伴わないと思う。現代中国農業を理解するには、せめて第１章の「中国農村改革回顧」(2000 年 10 月 10 日）と最終章の「1955 年の合作化大弁論を振り返る－鄧子恢同志の追憶」

（1995 年 8 月 10 日）を読んでいただきたいと思う。杜潤生先生の面目躍如の感に打たれる。

私は、出版元である農文協の原田津常務理事と同行して先生の日本での出版の了承を得るための交渉に伺い、また、北京での出版記念会にも出席した。この記念会の席には､先生の教え子に当たる多数の方々が出席し､実に和やかで、話題豊富で稔り多い記念会であった。旧知の劉志仁さんはもちろん、段応碧、陳錫文、杜鷹、李鉄、徐小青さんたち、現代中国農政の中核にいる方々と腹を割って懇談できたことが、つい昨日のように思い出される。杜潤生先生のご健康とご長寿を心からお祈り申し上げる。